The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『四庫全書総目提要』の『喩林』評価
Author(s)	佐藤, 一好
Citation	中国研究集刊. 1993, 12, p. 73-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60992
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『四庫全書総目提要』の『喩林』評価

佐藤一好

一

徐元太の『喩林』（注1）は、明代に編纂された比喩表現の類書である。自序によると、それは「経史子集自り、以て道仏諸書に及ぶ四百余種」の書物の中から、元太が「凡そ語の比辞に渉る者は、聖賢と流略との粕華を論ずる無く、目の嘗て見る所、必ず手づから焉を録す」という方針で編纂したものであり、中国の古典に見える比喩表現の類書としては、まさに空前絶後のいわば「比喩の宝庫」と言える。とすれば、この『喩林』が後世に次のような影響を与えているのも、当然の結果と見ることができる。

たとえば、薛夢得編『中外比喩詞典』（中国物資出版社、一九八六年）は、中国内外の比喩を「喩眼睛」（人体篇）「喩理想」（人生篇）などの項目によって、分類整理した極めて魅力的な辞典である。「喩真誠」（修身篇）を一例に挙げると、

你必須対你自己忠実、正象有了白昼才有黒夜一様、対自己忠実、才不会対別人欺詐。（三三九頁）

というシェークスピア『ハムレット』の台詞が見える。「自己に忠実であって、はじめて他人に対しても忠実になれる」ことを「昼が来て、はじめて夜が来る」ことに喩える、このシェークスピアの比喩のように、薛夢得氏は、中国のみならず国外の比喩をも精力的に収集し、これに興味深い解説を加えているのである。そして何よりも注目すべきは、薛氏が「自序」において、この『中外比喩詞典』の編纂を、

仮に「子は父の姓に随う」というわが国の習慣に

従うならば、この辞典は、まさに「徐」を父としなければならないであろう。というのは、（この辞典は）編者がかつて北京大学で勉学していた頃、明代の学者・徐元太の撰した『喩林』に触発されて、胚胎したもの（すなわち子）だからである。

と説明している事実である。これによると、薛氏の労作『中外比喩詞典』の編纂には、徐元太の『喩林』が根本的とも言える影響を与えていることが分かる。

また、わが国における比喩辞典としては現在、中村明『比喩表現辞典』（角川書店、昭和五二年）が知られている。もちろん、この辞典そのものは、日本近現代文学の比喩表現を収集したもので、『喩林』の直接的な影響を受けているとは考えにくい。しかし、中村氏がこの辞典と並行して『比喩表現の理論と分類』（秀英出版、昭和五二年）をまとめる際、恐らくは目にしたであろう先行文献（注2）に、川野健作『譬喩語類』（共益商社書店、大正二年）があることには注目すべきである。というのは、中国の古典の中から日本語の語彙を豊富にする比喩を選んで編纂された『譬喩語類』には、徐元太の『喩林』の影響が顕著に認められるからである。たとえば、『譬喩語類』（二五二頁）が「言論」という項目を立て、『史記』孟子荀卿列伝を引き「巧妙に過ぎて実用に適せざる弁論文章を称して談天彫龍といふ」と解説するのは、『喩林』（巻八六）が文章門に「言論」の子目を立て、

騶衍の術は、迂大にして閎弁。（騶）奭は、文具われども施し難し。淳于髡は、久しく与に処れば、時に善言を得ること有り。故に斉人頌して曰く「天を談ずるは衍、龍を雕るは奭、轂過を炙るは髡なり」と。

を引いて、「『史記』孟子伝」と出処を明記するのと全く同様である。古典に見える比喩表現を内容ごとに分類するという発想そのものが、すでに『喩林』の影響下にあると言ってよい。とすれば、こうした『譬喩語類』を通して間接的には、わが国における比喩辞典にも『喩林』の影響があると見て、大過なかろう。

さらに、『百喩経』『譬喩経』『法句譬喩経』などの書名からも明らかなように、比喩はそもそも仏教と密接に関わっており、田上太秀『釈尊の譬喩と説話』（第三文明社、一九八一年）は、比喩を通しての注目

すべき仏教概説書である。また、森章司編『仏教比喩例話辞典』（東京堂出版、昭和六二年）は、こうした仏教関係の比喩を博捜し、「涅槃」「無常」などの項目を立て、用語の原義や比喩の諸相について丁寧な解説を加えた比喩辞典である。しかし、この仏教の比喩に対する森氏の博捜も、実は『喩林』の延長線上にあると見ることができる。というのは、元太が「経史子集自り、以て道仏諸書に及ぶ四百余種」に基づいて『喩林』を編纂する際に、すでに仏教関係の諸書からも相当数の比喩を摘出しているからに他ならない。『仏教比喩例話辞典』の一覧表が列挙する二百四十二種には及ばないものの、『喩林』も実は約二百種の仏典の中から比喩を蒐集しているのであり、それは仏教比喩辞典の歴史の上でも重要な位置を占めるであろう。

もっとも、山下正男『植物と哲学』（中公新書、昭和五二年、二二頁）が「植物と人間のアナロジー」について分析する際、

ヨーロッパにおいて森（sylva, wood, Wald）という語は、しばしば詩集や作品集の表題に使われる。ローマの詩人スタティウスの詩集は Silvae（『詩の林』）という表題をもっていた。またフランシス・ベーコンの著作 Sylva sylvarum（『森また森』）は、逸話、警句、小論説といった散文のコレクションであった。そうしてこのことは中国でも同じであって、『説林』（寓話を集めたもの）『喩林』（比喩を集めたもの）等々の書名がみられるのである。

と指摘するように、徐元太の『喩林』は「林」を書名とする点においては、中国でも決して珍しい存在ではない。『韓非子』説林篇のみならず、『意林』『易林』『語林』などを直ちに想起することができる。

しかし、すでに郭子章（字は相奎）の「喩林序」（注3）が、

往牒の喩言を載すること、六経自り子史百家に及ぶまで、夥し。（而して）未だ彙めて書と為す者有らず。喩を彙めて林と為すは、今の少司馬・中丞徐公（元太）より始まる。

と述べているように、『喩林』の存在意義は、あくまで「喩を彙めて林と為す」という点にあるのであり、山下氏も実は『動物と西欧思想』（中公新書、昭和四

九年、八頁）において、この比喩辞典としての『喩林』の意義を十分に認めている。のみならず、山下氏が英語の比喩辞典の誕生を一九一六年に求めている事実に注目すると、通行本の『喩林』が万暦四十三年（一六一五）の序刊であることは、驚嘆に値するとも言えるのである。すなわち、徐元太の『喩林』は、世界の百科全書の歴史の上で十分に光彩を放つ可能性がある。

そして、この比喩表現の類書としての『喩林』に本格的な解題を施し、『喩林』の欠点を鋭く指摘しながらも、

然れども六経自り以来、即ち多く況譬を以て意を達す。而して古自り未だ彙めて一書と為す者有らず。元太が是の編、実に刱例を為す。

と述べ、最終的には『喩林』の独創性を評価しているのが『四庫全書総目提要』（子部類書類）である。当然、この解題は以後の『喩林』研究の基礎となり、近年の潘景鄭「影印『喩林』序」（注4）も、『四庫提要』の解題に基づく『喩林』を「類書の創作」とする評価を行っている。しかし、この『四庫提要』の解題には、まだ不十分な点があると思われるので、次節で考察を試みる。

二

『四庫全書総目』（中華書局、一九八七年、一一五四頁）は、徐元太の『喩林』百二十巻（両江総督採進本）について、次のような解題を行っている。ただし、通行本の提要に、いわゆる「書前提要」と異なった個所が認められることを、一般論として、すでに近藤光男氏（注5）が指摘している。

明の徐元太撰。元太、字は汝賢。（南京寧国府）宣城の人なり。嘉靖乙丑（一五六五年）の進士。官は（南京）刑部尚書に至る。

徐元太の生涯についての『四庫提要』の記述は、極めて粗略である。元太の名が『明史』（李応祥伝など）に散見する程度であることを考えると、それは致し方ないことかもしれない。しかし、たとえば申時行（字は汝默）の「封刑部郎中徐公墓誌銘」（『賜間堂集』巻三一）などを見ると、父の徐亨之が「廉直」を尊んだことが分かり、この父の影響を受けて「廉直」を旨

とする生涯を送った元太が『喩林』の子目に「廉潔」を加えていることは興味深い。たとえ『喩林』のように網羅的な類書であっても、編者の生涯との重層性には、一応の考慮を払うべきであろう。なお、この点については、別稿「徐元太の生涯と『喩林』」（『学大国文』三六号）で考察する。

是の書、古人譬を設くるの詞を採摭して、彙めて一編と為す。（造化・人事・君道・臣術・徳行・文章・学業・政治・性理・物宜の）十門に分かち、門毎に又た各〻子目に分かつ。凡そ五百八十余類。二十余年を歴て後成る。心を用うること頗る勤至と為す。

『四庫提要』は次に、『喩林』の構成について説明する。子目の数は、厳密に言うと五百八十四。周中孚の『鄭堂読書記』（巻六二）が指摘するように、「其の体例は古の未だ有せざる所と為す」と考えてよい。しかし、「又た叢穢蔓雑にして省観に便ならざるを病み、因りて詮次を加えて編を成す」と自序において述べる元太が、子目の選定にどれほど時間を費やしたのかについてはよく分からない。重複していると思われる子目も認められる。また、『四庫提要』が「二十余年を歴て後成る」と述べる根拠であろう「褐を釈きて従り遡るに、計えて二紀有り、食を退いても虚しうする罔く、積みて鉅帙を成す」という元太のことばについては、後述する『喩林』八十巻本を実見の上でないと分からない。もっとも、「釈褐」が官吏となることを意味する以上、「二紀」（二十四年）という期間は、八十巻本の刊行時期（万暦十七年）とほぼ一致しており、『四庫提要』が底本とする百二十巻本『喩林』の刊行（万暦四十三年）には、さらに二十六年の歳月を要する。とすれば、『喩林』の編纂に元太が「心を用うること勤至と為す」と述べる『四庫提要』の見解は、いずれにせよ妥当なものと言ってよい。

其れ書を引くに、程大昌が『演繁露』の例を用いて、皆な条下において註もて出処を明らかにし、併せて篇目巻第、一一臚載す。亦た迥かに明人の剽窃撏撦の習に異なり。

続けて、『四庫提要』は『喩林』の特徴を指摘する。剽窃が横行した明代の書物にしては珍しく、元太の『喩林』が出典を詳細に注記していることを絶賛するので

ある。『鄭堂読書記』及び『四庫全書簡明目録』では、程大昌の『演繁露』とともに、李匡乂の『資暇集』を『喩林』の先蹤とする。しかし、元太の出典注記はこれらの先例に比べ、はるかに厳密と言える。たとえば、『喩林』（巻五）人事門「類応」には「悪を行いて悪を得るは、苦しみの種を種まくが如し」という比喩が引かれており、元太はその出典を「『法句経』愛身品」と篇目まで明示している。また、篇目がない場合には巻第を正確に記そうと心掛けている。従来の類書とは、この点が大きく異なっており、形式面での『喩林』最大の特色と考えてよかろう。

其の自序に称すらく、「書を閲すること四百余種」と。而れども其の列する所の書名を検ぶるに、実に半ばを逾えず。殆ど其の数を約挙して、未だ詳核するに及ばざるか。

以下、『四庫提要』は『喩林』の問題点を列挙する。元太が自序において「書を閲すること四百余種」と述べていることを第一に問題とするのである。ただし、この部分は『四庫提要』の主張が不明瞭なので、

特り其の自序に称すらく、「書を閲すること四百余種」と。而れども書中　列する所の篇籍を検核するに、実に其の半ばに及ばず。未だ誇張に渉るを免れず。

と述べる「書前提要」に従って解釈しておく。すなわち、『四庫提要』は、元太が述べる「四百余種」という引書の数が、実際とは大きく異なっているとし、自序のことばに「未だ誇張に渉るを免れず」と疑問を呈している。「列する所の篇籍」とは、百二十巻本の巻頭に見える「喩林書目・採摭諸書」であろう。しかし、不思議なことに、この「採摭諸書」に挙げられている書名を数えると、元太が述べるように実は「四百余種」なのである。「採摭諸書」が、たとえば『荘子』『郭象註荘子』『荘子音義』を個別に扱うような事例を差し引いても、「実に半ばに及ばず」という『四庫提要』の見解は、不当である。文淵閣本には「採摭諸書」が削られているので、速断はできない。しかし、『喩林』には後述するように、八十巻本や『喩林髄』という刪本があったことが指摘されており、『四庫提要』がこうした『喩林』の異本と百二十巻本とを混同している可能性はあろう。

其の中、手に随いて摭拾し、亦た往往にして本始を得ざるものあり。如えば（「責実」の）「兒説は宋人の善く弁ずる者なり」の一条、本と『韓非子』（外儲説左上篇）に出づ。（「遭遇」の）「周人に仕不遇なる者有り」の一条、本と王充の『論衡』（逢遇篇）に出づ。（而れども）皆な『芸文類聚』（獣部・馬、人部・泣）を引く。（「貪昧」の）「金玉を抱く者は生きて帰らざるに至る」の一条、本と『後漢書』耿弇伝に出づ。而れども『文選』（鮑明遠の「行薬至城東橋」詩）李善註を引く。（「失時」の）「頭白は期すべきも、汗青は日無し」の一条、本と劉知幾の『史通』（忤時篇）に出づ。而れども『事文類聚』（儒学部・作史）を引く。「天寒ければ即ち飛鳥走獣すら尚お相依るを知る」の一条、本と沈約作る所の『阮籍詠懐詩註』に出づ。而れども亦た以て李善と為す。此の類、頗る多し。

第二の問題点として『四庫提要』が指摘するように、元太が記す出典に時として不手際があることは事実である。周中孚の『鄭堂読書記』も「注する所の出処、其の本始を得ざる者、頗る多し」と『四庫提要』を敷衍する。しかし、たとえば沈約の『詠懐詩註』のように、元太の説明不足と考えられる場合もあり、一概に「手当たり次第に集めたから」とは言えないであろう。すなわち、元太は『喩林』（巻五三）人事門「貪昧」の比喩として、「天寒ければ即ち飛鳥走獣すら尚お相依るを知る」に始まる一文を引き、『四庫提要』が指摘するように、確かに「『李善註文選』阮嗣宗詠懐詩」と出典を記す。しかし、『李善註文選』を見ると、この文は「如何当路子」以下に対する注釈として李善が引く「沈約曰」の部分であることが分かる。とすれば、この程度の不手際は『喩林』のような類書では起こりやすいものであり、「影印『喩林』序」が述べるように、「煌煌たる巨編の自ら免れ難き所」と許容してよかろう。そもそも、『四庫提要』が「頭白は期すべきも、汗青は日無し」の出典とする劉知幾の『史通』（忤時篇）を、「書前提要」では『唐書』（劉知幾伝）としており、混乱がある。とすれば、厳密な意味での出典調査を『喩林』に求めることは、酷である。むしろ『四庫提要』が出典として書名だけを記すのに比べ、多少

の不手際はあるにせよ、篇名・巻数までをも詳細に記す『喩林』の有用性を認めるべきであろう。

又た杜預・何休・范甯を以て漢人と為し、陳寿を以て魏人と為し、李善を以て隋人と為すが如きは、皆な時代舛迕なり。申培の『詩説』・（黄憲の）『天禄閣外史』・（諸葛亮の）『武侯心書』の類は、皆な明代の偽書なれども、弁別する能わず。『広成子』は、本と蘇軾（が）『荘子』従り摘出して、偶〻此の名を題すれども、乃ち別に一書と為す。『無能子』に云う、「何の代の人なるかを知らず」と。皆な疎略に失するを免れず。

『四庫提要』は『喩林』の問題点を、さらに別の角度から指摘する。元太が「採摭諸書」として掲げる一覧表について問題にするのである。「漢の公羊寿の伝、何休の解詁」と『春秋公羊伝注疏』（経部春秋類）を解題する『四庫提要』が何休を漢人とする『喩林』に疑問を呈するのは、不思議である。しかし、その他の指摘は妥当であり、『喩林』の時代考証には確かに粗略な点がある。ただし、『四庫提要』が指摘する偽書に対する問題意識は、元太の念頭には恐らくなかったであろう。とにかく出典を明記して比喩を蒐集することが、「尤も喩言を嗜む」と自序で述べる元太の関心事だったからである。「『無能子』に云う」については未詳である。「『喩林』引書索引」に徴しても、百二十巻本『喩林』には『無能子』からの引用はなく、元太の「採摭諸書」にも挙げられていない。元太が『天隠子』について「何の時の人なるかを知らず」と述べていることと混同している可能性があろう。なお、文淵閣本の「書前提要」には、この一段全体がなく、元太の学問を、

蓋し其の学、惟だ知　以て氾濫し、自ら奥博を矜る。而れども考核精詳する能わず。故に毎に舛漏の病を踏む。

と評する厳しいことばが見える。しかし、元太の学問全体を論ずるには『喩林』以外の著書（注6）についても検討する必要があり、この「書前提要」の評価は軽率な判断と言わざるを得ない。

然れども六経自り以来、即ち多く況譬を以て意を達す。而して古自り未だ彙めて一書と為す者有らず。元太が是の編、実に剏例を為す。其れ蒐羅繁

富にして、零璣断璧も、均しく文を綴る者の沾匂の資と為すに足る。是れ亦た無一の書とすべからず。

類書としての『喩林』に多くの欠点があることを認めながらも、『四庫提要』は元太の博捜を「無一」の作業と斥けてはいない。「無一」の出処は、司馬相如「子虚の賦」の「無一可」であり、「一つとして見るべきところがない」という意味である。むしろ『喩林』の比喩を『唐書』（杜甫伝賛）の「後人を沾丐すること多し」に基づいて、「沾匂の資と為すに足る」と称賛している。もっとも、『喩林』を類書の「刪例」と断ずる『四庫提要』が、呉仕期（字は徳望）の『古今名喩』八巻（注7）に全く言及していないことには、問題がある。しかし、この『古今名喩』の編纂は、鮑延毅編『寓言辞典』（明天出版社、一九八八年、七九頁）において祝晋文氏が指摘するように、かなり杜撰なものであり、徐元太の『喩林』には遠く及ばないと考えてよい。とすれば、元太が「当に『御覧』等の編と奇芳を鄧林に争うべし」と自負を抱いて世に問うた『喩林』百二十巻は、この『四庫提要』の評価（注8）によって、永遠の生命を得たと言うことができる。ただし、『四庫提要』は百二十巻本の刊行に先立って、八十巻本が刊行されている事実を見過ごしているので、次節ではこの『喩林』版本の問題について検討する。

三

徐元太の『喩林』には、『四庫提要』が底本とする百二十巻本とは別に、八十巻本が現存している。たとえば、王重民『中国善本書提要』（上海古籍出版社、一九八三年、三八一頁）には、通行する「十行二十字」の百二十巻本とともに、「十一行二十四字」の八十巻本についての解題が見える。この八十巻本は、王氏によると「華陽子輯」と題されており、「宣城華陽の徐元太汝賢父編輯」と題されている百二十巻本とは、字数・行数ともに大きく異なっている。しかし、この王氏が解題を加える北京大学図書館蔵『喩林』八十巻本は、郭子章の序が付されているのみで、元太の自序を欠いており、刊行年については未詳である。

しかし、屈万里『普林斯敦大学葛思徳東方図書館中文善本書目』（芸文印書館、民国六四年、三三七頁）が、

巻端に郭子章の序有り、未だ年月を署せず。又た徐氏の自序あり、万暦己丑（十七年、一五八九）と題す。按ずるに、此れ初刊本と為す。万暦四十三年（一六一五）徐氏の重刊本に至りて、則ち拡充して一百二十巻と為す。

と解題する八十巻本には、元太の自序が残っており、通行の百二十巻本が万暦四十三年（乙卯）と題するのとは異なり、この八十巻本は万暦十七年（己丑）と題することが明らかにされている。注目すべきは、「明の万暦の間、中州の何氏刊本」と目されるこの八十巻本を、屈氏が『喩林』初刊本と指摘している事実（注9）である。すなわち、この八十巻本は『国立中央図書館善本書目・増訂本』（民国五六年、六三八頁）にも、「明の万暦の間、中州の何氏原刊本」と見えるように、『喩林』の原刊本と考えられている。

この点で、前掲「影印『喩林』序」において、王氏の『中国善本書提要』に基づき、元太の自序を欠く八十巻本から、

（『喩林』刊本の）一つは、百二十巻本で、徐氏の自刊本である。もう一つは、十一行二十四字の八十巻本で、万暦年間の刊本である。「華陽子輯」と題するのみで、（刊行の経緯を明らかにする）序跋の類が付されていないが、内容が（百二十巻本の）三分の二であることから、完本でないことが分かる。

と述べる潘景鄭氏の解題には、問題がある。『喩林』の刊行を「八十巻本から百二十巻本への増補」と捉える屈氏とは逆に、潘氏がこれを「百二十巻本から八十巻本への刪改」と捉えているからである。しかし、ここでは『増訂四庫簡明目録標注』における邵章「続録」が「明の万暦十七年刊の八十巻本あり」と指摘している事実も考慮し、元太の八十巻本の自序を実見の上「八十巻本から百二十巻本への増補」を主張する屈氏の見解に、一応の軍配を上げてよかろう。

とすれば、清代以後の多くの書目に、八十巻本『喩林』が稀にしか見えないのは、万暦十七年刊『喩林』八十巻本を、万暦四十三年刊『喩林』百二十巻本が駆逐してしまったからと説明することができる。事実、八十巻本については、孫星衍の『孫氏祠堂書目』（内篇巻三、類書、事類）に「喩林八十巻、明の徐元太撰」

と見えるのが、数少ない一例である。これに対して、百二十巻本についての記録は、たとえば次に列挙する書目に見える。なお、『喩林』は、おおむね「子部類書類」に著録されているので、ここでは巻数のみを記すに止める。

莫友芝『郘亭知見伝本書目』（巻一〇）
莫友芝『持静斎蔵書記要』（巻上）
鄧邦述『寒瘦山房鬻存善本書目』（不分巻）
丁　仁『八千巻楼書目』（巻一三）
陳乃乾『測海楼旧本書目』（巻三）
呉引孫『揚州呉氏測海楼蔵書目録』（巻四）
祁理孫『奕慶蔵書楼書目』（巻三）
丁日昌『持静斎書目』（巻三）
汪　憲『振綺堂書目』（巻三）

何澄一の『故宮所蔵観海堂書目』（巻三）に見える「喩林九十八巻」などの残巻本を除いても、百二十巻本についての記録は相当数に登っている。銭泰吉の『曝書雑記』（巻上）の記事（注10）によると、清代には『喩林』百二十巻が文人たちの好評を博したようであり、『喩林』を争って買い求める文人たちのために、ついに書肆が手に入れることも困難になったという。『喩林』は、やはり『四庫提要』が指摘するように、「文を綴る者の沾匂の資と為すに足る」貴重な類書だったのである。

そして興味深いことに、元太の『喩林』は、明末にはすでに『喩林髄』という祖述者を持っていたことが明らかにされている。すなわち、張滌華『類書流別・修訂本』（商務印書館、一九八五年、一〇一頁）が、鄭振鐸の『西諦書目』（巻二）に見える、

『喩林髄』存九巻。明の徐元太輯、鄒道元刪校。明の天啓刊本。四冊。巻一より四に至るまでと、九より十三に至るまでとを存す。

という記録に従って紹介するものであり、この『喩林髄』は黄虞稷の『千頃堂書目』（子部類書類）にも撰者未詳の「『喩林髄』十巻」として著録されている。鄒道元（注11）について詳しいことは分からないが、『喩林髄』という書名からも明らかなように、『喩林』の精髄を集めて一書としたものに相違なかろう。また、『明史芸文志補編・明書経籍志』（子部雑家類）に見える『譬喩纂言』や、『北京図書館古籍善本書目』（子

部雑家類）に「明抄本」として著録される『喩彙』なども、『喩林』の影響を受けている可能性があろう。

そして、こうした『喩林』の影響は、清代に至るまで続いている。たとえば『増訂四庫簡明目録標注』が「摘抄本有り。『喩林一葉』と名づく。二十四巻」と指摘する、王蘇（注12）の『喩林一葉』がそれであり、現存している。この『喩林一葉』については、鄧嗣禹『燕京大学図書館目録初稿・類書之部』（燕京大学図書館、民国二四年、一八頁）に、詳細な解題があり参考になる。すなわち、鄧氏は「前に乾隆甲寅（五九年、一七九四）の自序及び例言有り」と指摘した上で、

自序に拠れば、癸丑（乾隆五八年）の長夏、以て暑を消うこと無く、徐汝賢（元太）の『喩林』を取りて、日ごとに一巻を録す。其の菁英を掇り、其の繁複を去り、四閲月にして畢る。これに名づけて『喩林一葉』と曰う。原書の五巻を合せて一巻と為す。凡そ二十四巻。門類子目、悉く其の旧に仍り、並びに其の目録を存す。

と『喩林一葉』誕生の経緯を説明している。『喩林』との顕著な相違は、元太が仏教・道教関係の比喩をかなり重視していたのに対し、王蘇は「原書は仏老及び僞書を引くも、多く刪略に従う。存するもの十に一無し」と、これを削っている点であろう。しかし、『喩林』の体例は、ほぼ維持されており、王蘇の『喩林一葉』には明らかに『喩林』の祖述者的な性格が認められる。なお、この『喩林一葉』は乾隆以後、咸豊年間にも刊行されたようであり、たとえば『江蘇省立国学図書館総目』（巻三〇）には、「『喩林一葉』二十四巻。清、江陰の王蘇。咸豊刊本」と記されている。

また、清代には『喩林』の祖述者として、さらに『中央研究院歴史語言研究所善本書目』（民国五七年、一四三頁）に見える『喩林一枝』六巻がある。もっとも、『喩林一葉』が『清史稿』（芸文志、子部類書類）や『清朝続文献通考』（巻二七五、経籍）などに著録されているのとは異なり、『喩林一枝』は抄本であり、清代以後の書目類に、その名を見出すことは難しい。前掲『曝書雑記』（巻上）は、ほとんど唯一の例外と言ってよい。銭泰吉が「恬斎嘗て一冊を摘鈔し、『喩林一枝』と名づく」と述べる『喩林一枝』は、他でもなく銭泰吉の一族、銭恬斎（注13）が著したものだか

らである。「古人喩を設くるの辞を採摭し、彙めて一編と為すこと、自来の類書の未だ有せざる所と為す」という銭泰吉の『喩林』評価は、『四庫提要』と同様で、それはまた『喩林一枝』を著した銭恬斎の思いをも代弁するものであったろう。

以上のように、徐元太の『喩林』は、中国の古典に見える比喩表現の類書として、後世に『喩林一葉』や『喩林一枝』などの確たる祖述者を持っている。冒頭に紹介した薛夢得編『中外比喩詞典』の編纂も、実は『喩林』に触発されてのことであった。一般に、すぐれた著作には、絶えることなく祖述者が出現するものであろう。とすれば、徐元太の『喩林』は、『四庫提要』が「刱例」と評価するに足る、中国が世界に誇り得る百科全書(注14)の一つと言ってよい。

注

1　現在、容易に入手できる『喩林』のテキストには、次の三種がある。

①新興書局有限公司影印本（民国六一年）

②上海辞書出版社影印本（一九九一年）

両者ともに底本は明の万暦四十三年刊本で、郭子章の「喩林序」・徐元太の「喩林自序」ともに存する。②の末尾には、李新華氏などの手による「『喩林』引書索引」が付されており、至便である。

③上海古籍出版社影印本（一九九一年）

いわゆる「四庫類書叢刊」の一つで、文淵閣本『喩林』の影印である。文淵閣本の「書前提要」を見る上で、さらには万暦刊本との校合を行う上で、必要不可欠なテキストである。ただし、郭子章の「喩林序」は削られている。

2　もっとも、『比喩表現の理論と分類』巻末に付されている「比喩関係文献リスト」には、川野健作『譬喩語類』の名は見えない。しかし、『譬喩語類』は「譬喩」を書名とする点で検索が容易であり、中村氏が「明治中期以後一九七四年までに日本国内で刊行された、比喩表現に関連の深い言及を含む日本語の文献」を博捜する際、一度は目にしたと考える。

3　郭子章の「喩林序」は、「聞之曰、易者象也、象也者像也。詩有六義、其三曰比。言之貴兪上矣。故蒙荘寓言籍外論之、韓非喩老継以説林」と始まる興

味深い比喩論として、注目に値する。たとえば、胡永林『文学比喩辞典』（陝西人民教育出版社、一九八六年、八四〇頁）が「名家論比喩」として紹介する代表的な比喩論と比べても、質量ともに見劣りはしない。

4　前掲②に付されており、『喩林』についての最新の解題である。しかし、潘氏が「『喩林』百二十巻、宣城華陽の徐元太汝賢父編輯、猶子徐胥慶無猜父校、徐昭慶穆如父閲と題す」と述べているのは不十分で、編者と校者は正しいが、閲者は巻一が徐衍慶伯蕃、巻二が徐昭慶穆如、巻三が徐朋慶寿如であり、以下この順序で分担閲読している。

5　近藤光男『四庫全書総目提要・唐詩集の研究』（研文出版、一九八四年）の「凡例」。また、郭伯恭「四庫全書纂修考」第一一章「四庫全書総目提要」（『四庫全書之纂修研究』大東図書公司、一九八〇年）参照。

6　康熙『寧国府志』（巻一八、人物、名臣）が指摘するように、元太には『喩林』以外にも、『史鑑』『吟易』『撫蜀奏議』などの著書があり、黄虞稷の『千頃堂書目』（巻三〇、集部、表奏類）は「徐元太『撫蜀奏議』」を著録する。『台湾公蔵善本書目人名索引』（国立中央図書館、民国六一年、五三七頁）によると、『全史吏鑑』四巻（明万暦刊本）と『撫蜀奏議』巻七から巻九（明刊本）が現存している。

7　呉仕期の『古今名喩』八巻（大阪府立中之島図書館蔵）は、『喩林』同様、古今の比喩を蒐集した「類書」と言ってよい。ただし、従来は「子部雑家類」に著録されており、質量ともに『喩林』には遠く及ばない。しかし、「万暦戊寅（六年）」の刊行と目される『古今名喩』の編者、呉仕期が徐元太と同郷の宣城の人である以上、『喩林』誕生の経緯を明らかにする鍵が『古今名喩』に対する考察を通して得られる可能性はあろう。

8　『喩林』に対する最終的な評価は、「然自秦漢以迄六朝、文人詞賦、多以罕喩為工、恣肆汪洋、大都得力於此。元太是編、蒐羅極備、零璣断璧、均足為綴文者沾丐之資、猶為有裨芸苑。以視坊本類書之叢雑無章者、固勝之遠矣」と述べる「書前提要」の場合も同様である。

9　近年の羅偉国・胡平『古籍版本題記索引』（上海書店、一九九一年、五九一頁）を見ると、『喩林』について「明の万暦七年（一五七九）刊本」と記している。しかし、これは、恐らく『書目類編』所収の莫友芝『持静斎蔵書記要』（巻上、子部）が「喩林一百二十巻、明徐元太撰、万暦己卯刊」と、「乙卯」を「己卯」に誤刻していることに由来する誤りであり、『喩林』の刊行は屈氏が指摘するように、この八十巻本に始まると考えてよい。

10　『曝書雑記』（巻上）には、「族子恬斎方伯語予、嘉慶初年欽命詩賦題、往往取此書。一日、瑠璃廠書肆捜索殆尽。蓋翰苑諸公争購読也。恬斎嘗摘鈔一冊、名喩林一枝。余過葯房時取観焉。近日此書値稍減、乃得有之。毎一披覧、古藻満目、於釈典摘取尤繁富」とある。

11　張滌華『類書流別・修訂本』（八九頁）には、黄虞稷『千頃堂書目』（巻一五、子部、類書類）に著録される『王氏類苑詳注』三十六巻の編者を「晋江の鄒道元（字は善長）」とする考証が見える。

12　王蘇（字は儕嶠）は、乾隆五十五年の進士。光緒『江陰県志』（巻一七、人物、文苑）に略伝がある。「幼通敏。父曙課以詩古文辞、即操筆立就。少長博聞強記、学使彭文勤目為異才」と若い頃から文才に恵まれた王蘇は、興味深いことに、徐元太と同様「敢言有直声」と評されている。

13　銭恬斎については未詳。ただし、陳徳芸『古今人物別名索引』によると、恬斎が銭実甫（原名は昌齢）の可能性がある。銭実甫は嘉慶四年の進士で、道光『嘉興府志』（巻二九、列伝、循吏、秀水県）に略伝が見える。

14　呉則虞『中国工具書使用法』（上海古籍出版社、一九八八年、六四頁）は、類書を「総合編纂」と「分類別纂」に大別し、前者について「這種綜合性的類書、如同現今的百科全書和辞典相近、或以事類統纂、或以字句記彙」と指摘した上で、『喩林』を「況譬詞彙」の類書とする。

［付記］本稿は、市川国際奨学財団の研究助成金による「中国における「百科全書」の総合的研究」の研究成果の一部である。